子どもが主体的に取り組む社会科学習の展開
ー子どもの問いから出発する社会科学習の指導法の工夫をめざしてー

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 1
Ⅱ　研究の仮説 …… 2
Ⅲ　研究の全体構想図 …… 2
Ⅳ　研究の内容 …… 3
　1　教師の指導性と子どもの主体性の統一 …… 3
　　(1)　主体的な学習のきっかけをつくる …… 3
　　(2)　探検・調べる学習を支えるための学習の場を設ける …… 3
　　(3)　関わってくれる前向きな人々との生き様に出会わせる …… 4
　　(4)　調べたことを交流しあう学級集団をつくる …… 4
　2「ひと」・「もの」・「こと」に出会うことと、共に学ぶこと …… 4
　3　子どもの「問い」を大事にし実体験を通した指導法の工夫と教材の開発 …… 6
Ⅴ　授業実践 …… 10
　1　単　元　名 …… 10
　2　単元の目標 …… 10
　3　単元について …… 10
　　(1)　教材観 …… 10
　　(2)　指導観 …… 11
　　(3)　児童観 …… 11
　4　学習計画 …… 13
　5　本　時 …… 15
　　(1)　ねらい …… 15
　　(2)　本時の仮説 …… 15
　　(3)　展　開 …… 15
　　(4)　評　価 …… 16
　6　検証授業を終えて …… 16
　　(1)　授業の記録 …… 17
　　①　「漆器」グループの発表 …… 17
　　②　「紅型」グループの発表 …… 18
　　(2)　考　察 …… 19
　7　資　料 …… 19
Ⅵ　研究の成果と課題 …… 20
　　〈主な参考文献・引用文献〉 …… 20

宜野湾市立　普天間小学校
崎　濱　陽　子

＜社会科＞

子どもが主体的に取り組む社会科学習の展開

―子どもの問いから出発する社会科学習の指導法の工夫をめざして―

宜野湾市立普天間小学校　教諭　崎　濱　陽　子

Ⅰ　テーマ設定の理由

２１世紀を目前に、子ども達を取り巻く社会環境は目まぐるしく変化してきている。国際化、情報化、科学技術の進展等の一方で、いじめ・不登校等の問題も多く、今や大きな社会問題となっている。

このような多様な現状において、中教審第２次答申では、「生きる力」を前面に取り上げ、一人ひとりの能力・適正に応じた教育を展開していくことが必要であるとしている。

また、社会科の基本方針は、２１世紀に向けて「社会の変化に主体的に対応できる能力」を持った心豊かな人間の育成を求めている。

しかし、私自身の授業を振り返ると、教師主導で一斉画一授業を中心とした知識注入的な授業形態になりがちであった。また、教材や資料を準備し、授業に望むという過程を経ているが、子どもの興味・関心や疑問などを見落としたため、楽しく参加する授業になっていないという反省がある。

外山英昭氏の社会科の講義を受けたある学生の感想文の一部である。「私は小学校の低学年の頃まで、母親いわく『なぜなぜっこ』だったそうだ。何に対してもすぐ『なんで』と尋ね、いつも母親を困らせていたそうだ。しかし、大きくなるにつれてだんだんと問うことをやめ、自分で調べることをやめ、今では疑問を持つことさえなくなり、何に対しても無関心になった。」彼女はその原因として、①「問い」を受けとめ発展させることを手伝ってくれる人がいなかったこと、②必要な資料や情報にどう接近したらよいかわからなかったこと、③「問い」を対話を通して深めることができる学びの場がなかったこと、④その結果、「問う」ことはつまらないことだと思いこんでしまった。（『教え』から『学び』への授業づくり　社会科　外山英昭他編　大月書店）と分析している。これは、私の学級の子ども達にもいえるような気がする。

そこで、教師主導に偏りがちな学習計画を見直し、子どもの疑問・つぶやき・発想を大事にした学習を展開していきたい。

「問い」は教師によって与えられるよりも、子ども自身が「調べたいこと」から設定されるほうが、学ぶ対象におもしろさを感じるのではないだろうか。与えられる知識よりも「自分なりの問い」を持ち、探検し調べていくことが社会科で育てる「生きる力」なのではないだろうか。

このように、子どもが主体的に取り組む社会科学習を展開するために、第５学年「伝統に生きる工業」の単元を通し、身の回りにある本物の伝統工芸やそれに携わる人々に触れ、「子どもの問いを大事にする学習」を具体化し、理論を深めていきたいと思い本テーマを設定した。

II　研究仮説

子どもが自ら「問い」を持ち、「問い」を解決するために探検学習を取り入れることにより、主体的に学習に取り組むことができるであろう。

III　研究の全体構想図

教育関係法規
日本国憲法
教育基本法
学校教育法
学校教育法施行規則

学校教育目標
自ら進んで学習し、深く考えて学習する子
思いやりがあり、みんなと協力する子
心身ともに健康で、気力のある子

新学力観

社会科の目標
社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として、必要な公民的資質の基礎を養う

子どもの実態
- 素直で明るい
- 与えられた課題には取り組むが進んで学習する子は少ない
- 体験学習を好む
- 活発であるが意見を言える子が少ない

研究テーマ
子どもが主体的に取り組む社会科学習の展開
―子どもの問いから出発する社会科学習の指導法の工夫をめざして―

研究の仮説
子どもが自ら「問い」を持ち、「問い」を解決するために探検学習を取り入れることにより、主体的に学習に取り組むことができるであろう

研究内容
1 教師の指導性と子どもの主体性の統一
2 「ひと」「もの」「こと」に出会うことと共に学ぶこと
3 子どもの問いを大事にした指導法の工夫と教材の開発

研究の方法
- 文献・資料による理論研究
- フィールドワーク
- 社会科研究会への参加
- 指導案検討・検証授業と分析
- 担当指導主事の指導助言

検証授業

研究の成果と今後の課題

Ⅳ　研究内容

1　教師の指導性と子どもの主体性の統一

社会科とは、子どもに「社会」を教える教科であり、広範囲な領域の教科である。この広範囲な領域を教師は、実際には熟知しているわけではない。専門書・実践書などから教材研究をし、理解して指導にあたるが、教師主導の知識中心的な授業形態になりがちである。そんな時子ども達は「楽しい・もっと知りたい」という学習にはなっていないように思う。

子どもが自ら生活している地域社会をしっかり見つめるような、主体的な学習を育てる教師の指導性をこう考える。

１つは、自分達の生活している身近な地域について関心あるいは問題意識を持つ中で、その地域を理解して、好きになり、そこで生活していく意欲を育てるような主体的な学習のきっかけをつくること。

２つめは、子どもが持った興味・関心を調べるために、持続して学習していくために必要な学習の場を設けること。（場づくり）

３つめは、子どもが「問い」を持ち、探検•体験等、調べる学習をしていく過程で、それに応えてくれたり、関わってくれたりする人の前向きな生き様に出会わせること。

４つめは、探検を中心に調べたことを、なんでも発表し話し合える交流の場が必要であると考える。

(1)　主体的な学習のきっかけをつくる

子どもが生活している社会について、学習しはじめるためには、身近な人たちの生活やその人たちの生き方などに触れ、知りたい事＝「問い」を見つける事が大切である。子ども達がこれまでの生活の中で何気なく体験すること、または、生活の中で思うことを表現し話し合っていく中で、調べる対象が身近に感じられ、子どもなりのこだわりを持つ。そして、教師の支援と子ども同士の交流から「ひと」「もの」「こと」に関わっていく。その過程で「なぜだろう？」「あれは何かな？」等、「問い」が生まれ、主体的な学習のきっかけになる。

例えば、５年生の米学習では学習の入り口（導入）で、各家庭での米を通しての生活体験の交流から始まった。沖縄のように、米作りの盛んではない地域で米について理解するのは非常に難しい。そこで、毎日食べる米、食卓に上がる米の食べ比べから学習に入った。「自分の家で食べている銘柄」の話や「米によって味がかわるのか」など、興味を持ち、味比べに熱が入った。その後、子ども達は「味の違いはどこからくるんだろう」と、「問い」が発展していき、県外の稲作農家（不耕起米（ふこうきまい））との交流へとつながった。

(2)　探検・調べる学習を支えるための学習の場を設ける

子ども達が持った関心や問題を探検・体験につなげる上で必要な情報や資料がすぐ手に入るように教室や学年ワークスペースなど校内に学習の場を設けることが大切である。「問い」を持ち、主体的に追求したくても学習を深める情報や資料が準備されていなければ、解決していくためにどう調べていけばいいのかわからなくなる。子ど

も達は、何をどのように調べたらいいのかその調べ方がわからない時や資料の内容が難しすぎたり、抽象的だったり、調べる内容に関連する情報が不足する時、「問い」を興味を持って追求することを止めてしまう。

子どもの読みやすい資料を数多くそろえ、いろいろな関連ある施設や人・催し等の情報を身近に整えることは、子どもの「問い」を明確にし、解決させるためにも大事である。

また、学校図書館の社会科に関連のある文献リストを作成したり、関連のある図書を持ちより学級文庫を充実させたり、これまで指導してきた子ども達の中から同学年の子ども達がまとめた作品なども「学習材」となり、調べる活動を支えていける。

(3) 関わってくれる前向きな人々との生き様に出会わせる

前向きに生きる人との出会いは、子ども達が「問い」の答えを知り、その答えの中から地域の特徴や事象を理解していくということだけではない。地域には、それぞれの道・それぞれの仕事を専門的に一生懸命取り組んでいる人が多い。子ども達の探検隊に関わってくれるそのような人達との出会いは、その人が仕事を通して直面している問題や新たに挑戦している取り組みや工夫、仕事を通して社会に貢献したいという願いなどに触れていき、今まで見えなかった部分が明らかになり、自分の生活している地域社会をより身近なものとして意識しはじめる。さらに、社会の中の自分の位置に少しずつ気づきはじめ、自分なりの社会的なものの見方や考え方が育っていくようになる。

(4) 調べたことを交流しあう学級集団をつくる

一人一人の調べる活動は、子どもの「問い」から出発し、探検して事実を知ることで深まる。しかし、自分だけの学習では視野が狭くなる可能性があり、かたよった問題解決に陥りがちである。そこで、各人や各グループで調べたことを発表する機会を保障することにより、調べたことが互いに結びあっていく。「もっと知りたい・調べたい」という意欲をはげまし、調べたことを発表することで、認められる。発表がおもしろければ聞く方もおもしろくなっていく。その中で、おもしろい情報や新しい発見をおおいに評価し、学習の発展につなげることができる。

このような、子ども達が中心になって行う意見交流は、自分の足で探し確かめた具体的な内容を伴っているため、教師が予想する答え以上のものを引き出してくれる。そして、新しいワクワクする学習へと発展する時がある。このような時の子ども達は、真剣で学ぶことが楽しくなっている。

相互の自己表現は、更なる意欲を喚起するとともに、表現力・判断力・思考力を育成し、公民的資質の基礎育成につながると思う。

以上のような教師の指導性があれば、子どもの主体性は自ずと育つのではないかと考える。子どもの純粋な発想の中に、学習を深め楽しくする要素があるように思う。

2 「ひと」・「もの」・「こと」に出会うことと、共に学ぶこと

農業・水産業・工業の学習について考えた場合、現代の子ども達にとっては、働く場所が非常に遠く身近ではない。距離的に遠いというだけではなく、近くにそこで働く人

がいてもやはり関わりや意識からして遠いのではないだろうか。

それは、農家の子であっても農業を手伝っていなかったり、海から遠い地域で水産業に関わりがない等、見ようとしなければみえない世界であり、それだけわかりにくくなってきているのではないだろうか。見えないから見なくていいというわけではない。それは、子ども達の生活とは切り離せないし、見えない部分で生活を支えている人々がいることは事実である。見えない部分をしっかり意識して、見ていかない限りよりよく生活していくことはできないし、働く人々とつながって、よりよい方向をともに考えていくことはできない。そこで、「ひと」と出会う学習がとても大事になってくる。

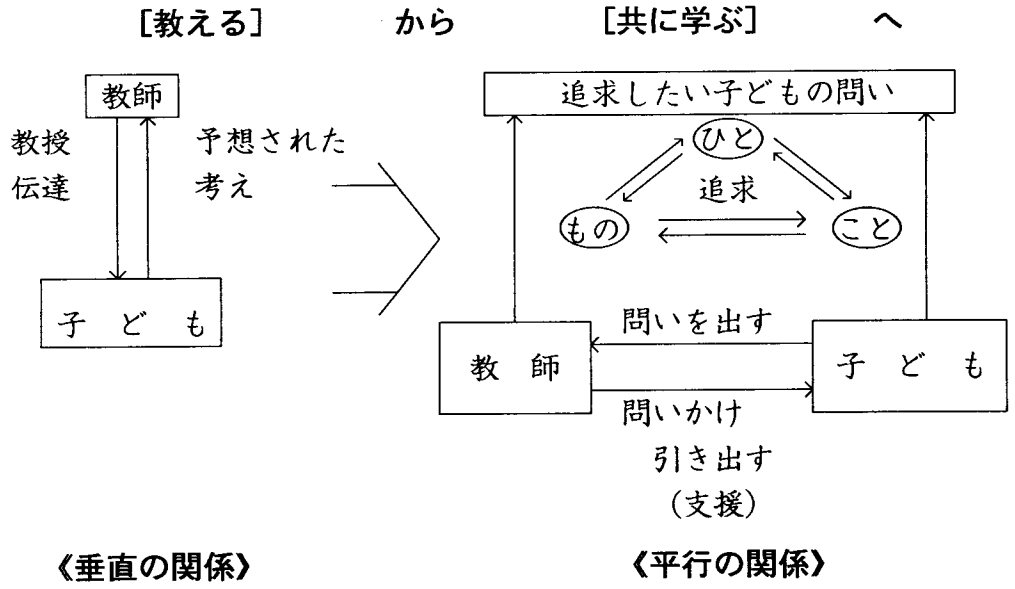
一生懸命働く「ひと」と結びつくことこそ、社会科にとって必要な学習ではないだろうか。

また、「もの」・「こと」に出会う学習も考えなければならない。

しかし、子どもの生活実態や興味・関心をしっかり把握できないままでは、授業を展開することは難しい。事実を見つめる中で、その事から子どもが感じたことを言わせ、気づかせようと発問を工夫したり、話し合わせたりして学習していく。そういう時子ども達は、自分なりに興味を持ち、「ひと」・「もの」・「こと」＝（具体的なもの）を見ている。

子ども達が調べたい「こと」（具体的なもの）・「ひと」・「もの」を見つけた時、教師は自分のものさしで切り捨てるのではなく、子どもなりのこだわりに寄り添うことも必要ではないだろうか。つまり、子ども達がこだわり追求していく「こと」・「ひと」・「もの」に教師が関心を示し、同じ立場に立って共に学習していくことが、子どもの「問い」を持続させ、発展させると考える。それは、子ども達自らが、様々な人々・地域・社会に働きかけ、社会を見る目を養っていくことにつながる。

教師のもつ学習の見通しや計画を、学習が進む中で弾力的に軌道修正したり、新しい展開を考えることも生じてくる。また、ねらいや見通しをしっかり立てると同時に、子どもの学習の道筋をしっかりとらえ、どちらか一方に流されることのないよう留意していく必要がある。



3　子どもの「問い」を大事にし実体験を通した指導法の工夫と教材の開発

ー第５学年『稲作にはげむ人々』の単元を通してー　［実践事例］

『稲作にはげむ人々』の単元では、子ども達にいかに米を身近に感じさせ、「問い」を生み出すかが課題であった。学習に入る前「先生、沖縄でも米ができるんですか」「田んぼを見たことがないよ」「どこで作っているの」など、関心があまりない。

そこで、沖縄の二期作米にあわせてミニ田んぼを作り、稲作りをベースに米学習に入ることにした。

(1)　【生活の場からの問い】ー主体的な学習のきっかけー

また、単元に入る前に農業試験場の見学や米の袋を集めるなど、題材に即した生活体験を組織した。袋を持って来るとき、子ども達は必ず食事の時の御飯の話をした。「こしひかりが一番おいしいって」「俺んちは、ひとめぼれ」「お母さんは魚沼産のこしひかりしか買わない」「いつもでいごだよ」「毎回買うのがちがう」など非常におもしろく、親との会話や家で食べる御飯を通して、身近に捉えはじめていた。

(2)　【調べやすい場づくり】

「学習材」としては、農協・農業試験場・那覇食料事務所からの稲作に関する資料（専門的な子ども達だけではちょっと難しい資料や、稲作のルーツ、稲の栽培の様子をわかりやすく漫画で表現した本、御飯の栄養、カラー写真や絵入りの御飯を使った料理の本等）や、図書・図鑑・米の袋を「コメコメコーナー」としておいた。最初のうちはあまり手に取る子はいなかったが、料理の本から少しずつ読み始めた。

(3)　【調べる対象を身近に感じさせる】

子ども達が米に興味を持ち始めた頃、米の何に興味を持ち始めているのか書き出してもらった。それは、教師自身が単元の見通しを持つためである。しかし、あくまでも参考程度につかんでおきたい。なぜなら、友達との学びが進むと、「問い」が解決されるとさらに「新しい問い」が生まれ次の追求へと進んでいく。子ども達は最初の疑問をそのまま持ち続けることはない。生活の中で、友達との学び・遊びの中で解決することもある。

〈米について考えたこと〉（一部）

- 米はいつ頃、どこから日本に伝わったのか
- 学校で食べる米の品種は何
- 米の品種はどのくらいあるんだろう
- 米は何ヶ月でできる？
- 沖縄県で作られる米の種類
- どの米が一番売れているか
- 米は田んぼでしかできないのか
- 米と麦の違い
- 米は同じ味なのにいろんな種類があるのはなぜか
- 品種が違うと米の形も違うのか
- 米に向く土地はどんな土地か
- 県によって米作りの時期は違うのか
- 日本人はなぜ米をよく食べるのか
- 日本が米を輸入している国は？
- 台風の時、稲はどうするのか
- 赤い米のこと
- 同じ米の品種なのに袋が違うのはぜ
- 世界のどんな国で米は食べられてるか
- 田植えの季節はいつか。
- 米の成分は
- 稲の苗の作り方
- 米のためになぜ機械を買うのか
- 秋頃にとれる米が１年中売られているのはなぜ

以上のような米に関する疑問を持ち始めていた。どの疑問をみても面白い。一つ一つ追求していけば単元全体の目標に近づきそうである。

(4) 【直接体験を通して学習に入る】

米の袋の観察から、「同じ種類の米でもなぜデザインがちがうのか」「こしひかりが多い」「同じ種類の米なのに値段が違う」等、疑問はさらに膨らんだ。そこで、「食べ比べる」という直接体験を通して学習に入った。

学習に入る前、小渡さんが言った「お母さんは毎回違うお米を買ってくるよ。いつも味がちがうよ」と、なにげなくもらしたことと、米についての疑問の中にあった与儀君の「米は同じ味なのにいろんな種類があるのはなぜ？」という二人の意見を取り上げ、実際に食味試験を行った。子ども達の学習では、「食べる」ということがさらに意欲を湧き立たせた。食味を終えての感想である。　（一部）

- 米もよく味わうと味が違うことがわかった。青が一番おいしかった
  （予想）青＝新米　赤＝こしひかり　黄＝ときめき　（夢野）
- ちょーおいしかった。どうして、形が違ったの。そして、色が違うの。　（久乃）
- 同じ時間で同じ量で作ったのに味がちがう。　（拓麻）
- ふだんは、お米の味などは、考えていませんでしたが、今日はこんなに味わいながら食べたら、お米の味の違いが分かったので、家でもやってみたいと思います。（有加）
- 今までは、おかずと一緒に食べていたけど、この授業で初めて米の味がわかった。（小夜子）
- 黄・赤・青の中で青がおいしかった。三つともねばねばしていた。甘いのもあったし甘くないのもあった。米には味のちがいがある。米には成分がある。　（与儀）
- 青はあまりつやがなかった。赤にはにおいはしなかった。ねばりがあったりした。甘かったこと。お米にも甘い感じがするんだと初めて知った。　（小渡）
- 味わいながら食べたとき、甘かったしおいしかった。私は、三つとも同じ味だと思った。私は、お米はこんなにおいしいと初めて知りました。米を炊くとほそくなっていました。それに香りも出てきたし、ねばりやかたさもでてきました。　（なつき）
- 全部味がちがう。今まで米は味がするかわからなかったけど、味がしたのでよかったこしひかりが出ていたけどわからなかった。（家で食べているのに）　（ゆかり）
- 黄が一番おいしかった。なんで味がちがうのか。　（顕）
- 米は一つ一つによって味がちがう。黄のねばりは強い。赤はあまりねばっていない青はちょーねばっていた。味はとてもおいしかった。形は、太っているのや長細いのがあった。同じ時間に炊いたのに、水っぽいのやちょっと固いの、香りが違うなんて初めてわかりました。しかも、つやや色もちがう。　（雅美）
- どれも味は同じような感じがしたけれど、でも黄色がおいしいような気がしました。産地はどこかと思いました。　（ひかり）
- 同じ米なのになぜ味がちがうのか。どうしてつややねばりがあるか。　（利江）
- よく見てみると、色がちがったりしていた。ねばりや味もちがっていた。食べてみてはじめて米の種類のいろいろなちがいがわかった。「なぜ、味や色がちがうのか」というのがいまだに不思議に思う。　（司）

「米によって味のちがいがある」とほとんどの子が答えている。おいしさの尺度には個人差があるが「米には味がある」と実感している。そして、それはなぜだろうとはっきりしたこだわりを持った。

(5) **【子どもが「問い」を持つ】**

食べ比べの後、「なぜ、味にちがいがあるのか。何がかかわっているのか。」を話し合った。子ども達が出した結論は、『産地』・『種類（品種）』・『作り方（農家の人によって）』・『平成８年か平成９年か（新しいか古いか）』『育ちぐあい』・『日光のあたりぐあい』によって、かわるんじゃないかということである。「この６つの項目を調べれば原因がわかるかもしれない」と、調べることになった。

(6) **【探検発表・交流をするなかで、「問い」を深め合う】**

子ども達は、グループになり探検活動をした。そして、学級に持ち帰りまとめ、発表した。調べたことを分担し、みんなにわかるように、大きくゆっくりと発表した。子ども達は、ドキドキしながら自分の役割を頑張っていた。質問され、答えられなくなるとグループのみんなが集まり相談している。どうしても答えられなくなると「もう１度調べてきます。」と言い、新しい「問い」となり次時へつなげた。感想に「～さん達すごいと思った。いつもはふざけている～君がよく頑張っていた」「はやく発表したい」「はやく～さん達の発表を聞きたい」とあり、探検・発表・交流が楽しくなってきているようである。

〈「産地」グループの中間発表〉交流

全国のお米マップを作り、品種と分布を説明した。また、病害虫・冷害・風雨に強いお米を作り、新品種も出てきている。各地方の気候にあった米を作り、その中でも「こしひかり」は北海道と沖縄を除くすべての県で作られていることを発表した。さらに、北海道のゆきひかり・新潟のこしひかり・熊本のひのひかりの食べ比べもしている。

（新しい問い）

○産地によって米の味がかわるのかを調べているんだから、食べ比べは同じ品種の米を比べるべきだ。 ○北海道と沖縄にはどうしてこしひかりが育たないのか。

〈「種類」グループの中間発表〉

このグループは、地域の３つのスーパー（カネヒデ・ユニオン）へ行きどんな種類の米があるのか調べた。また、資料から全国の品種についてまとめ発表した。

（カネヒデ）＝「いろいろな米が産地と品種ごとにわけてありました。もっとも多かったのが北海道産ゆきひかりでした。もっと調べた結果、産地不明のもあったし、ふくろは違うんだけど同じ所で作られたひとめぼれがありました。７年産100％や８年産100％などがありました。」

（ユニオン）＝「ユニオンにあったお米は、９ふくろもありたくさんの産地のお米があった。産地の違うお米でも名前が同じなのがあった。私はそこが変だなと思った。」

（こしひかりの人気の理由）＝「こしひかりは、1944年に新潟県の農業試験場で作られ、品質を高めるために何回も交配を繰り返して、味がよく色・つやのよい品種に育てられました。そのために、消費者に人気があり、いろいろな所で作られているのです。」

新しい問い
○７年産100％・８年産100％ととはどういう意味か。
○どうして、産地の違う米でも名前が同じか。
○どうして、同じこしひかりでも値段が違うか。
○「きらら３９７」の意味。

（稲刈）

〈「古い米・新しい米」グループの中間発表〉

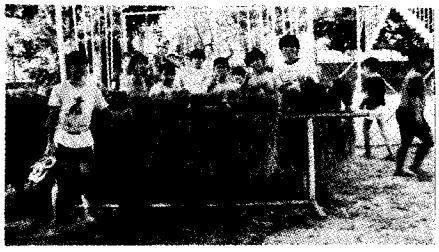
那覇食料事務所の資料からまとめ、1993年の冷害により米を保管することになったことや、８年産・９年産の意味そして、自主流通米と政府米についても触れた。

（お米のおいしさと鮮度を保つ低温保管）＝「お米は収穫後、次の年のお米ができるまで、あるいはそれ以上の期間保管して、徐々に消費されるのでお米のおいしさが損なわれないように保管することが大切。」

（古米を調べた結果）＝「１度梅雨をこした米のことを古米という。２度梅雨をこした米のことを古古米という。1993年食糧管理制度ができて古い米は政府が管理していることがわかった。けれども、食糧管理制度がなくなり、平成７年11月１日から新食糧法が実施されたことがわかった。」

（赤米を調べて）＝「赤米はインドから沖縄に輸入した。赤米は古代の米といわれている。」

新しい問い
○今ある米なのになぜ、古代米か。


（稲を乾燥させる）

〈「稲の育ち・日光の役割」グループの中間発表〉

稲作の「農事ごよみ」をつくり、月ごとに細かく説明した。しかし、北日本と西日本の例だけで、沖縄のことには触れていない。

新しい問い
○北日本・西日本と同じように沖縄でも育つのか。

以上のように、探検発表・交流を繰り返し、新しい情報を得ていった。調べたいことを聞き、学校で発表して友達や先生に評価される。自信がつき調べることが楽しくなる。

(7)　**【人と出会う】**

「農家によって作り方がちがうのか」を調べるグループは、インターネットの情報により、『乾田不耕起直播き栽培米（不耕起米）』を知った。そして、兼業農家・岩切さんとの交流がはじまった。岩切さん一家は、現代の農業に対する不信感があり、不耕起栽培に踏み切ったということである。子ども達は、「不信感って何ですか」「不耕起米はどうやって作るんですか」「肥料は使うんですか」「どんな利点があるんですか」等、「問い」を持ち、手紙をかいた。

☆（一般的な栽培）＝耕起→耕起→代かき→苗作り→田植え→→→稲刈り

☆（乾田不耕起米）＝種まき→→→稲刈り　で作業時間の省力化を計っている。

子ども達は、自分達の稲作りとの比較や病気の種類・農薬・不耕起米で育てている米の品種、さらに沖縄でも不耕起栽培はできるのか等質問し、不耕起米や農家の人の工夫や悩みを理解することができた。

子ども達の素朴な願いとして、「岩切さんの不耕起米を食べてみたい」と数名の子が手紙に書いた。大人では図々しくて言えないようなことも、子どもは素直に表現していく。そんな子どもに対して、一生懸命生きている人はみんなやさしいように思う。

（子どもの感想）

> ―略―　不耕起栽培は、手間が省けるだけでそんなに味もよくないと思っていたけど私がいつも食べているお米よりも、ずっとおいしかったです。甘みがあり、とてもつやがあってきれいでした。私達が作ったお米は、ちょっと黒っぽく固かったです。あんなに手間をかけて作ったのに、あまりおいしくなかったのは残念でした。でも、その反面岩切さん達が、どんなに苦労してお米を作っているのか分かったような気がします。
> ―略―

子ども達は、不耕起栽培米と自分達が大事に育てた米を味わうことで、おいしく作ることの難しさを知り、岩切さんの安全でおいしい米を作る努力と自分達の要求にすべて応えてくれた温かさに触れた。

V　授業実践

1　単　元　名　　「伝統に生きる工業」

2　単元の目標

- 伝統を生かした工業の持つ意味を考え、特徴・技術にこめられた工夫や努力のあとを読み取る。
- 伝統的な技術を生かした工業に関心を持ち、意欲的に調べわかりやすく表現しようとする態度を育てる。
- 歴史的背景や発展の過程を知り、その製品の持つ意味について考える。

3　単元について

(1)　教　材　観

本単元は、大単元「工業生産をささえる人々」の中単元①「工業のさかんな地域をたずねて」②「日本の工業の様子」③「公害をふせぐ努力」④「伝統に生きる工業」⑤「わたしたちのくらしと工業生産」の５単元の中の４単元目にあたる。①②では、工業生産に携わる人々の工夫・努力や工業製品の生産の様子をラインを敷き、流れ作業・大量生産をする大工場との結びつきを学習してきた。

本単元では、それと対照的に昔から伝わる技術やいろいろなやり方で、職人さんが手作りで作り上げたもの（伝統的工芸品）を取り上げ学習していく。伝統的工芸品は、できあがりの美しさや使いやすさで昔から親しまれ、愛されてきた。沖縄も例外では

なく、むしろ伝統的工芸品の宝庫である。

1879年の廃藩置県まで、独立した王国として、およそ１千年の歴史を有している。天然の資源をそれほど持たず、しかも多くの島々からなる琉球王国は、経済の基盤を広く海外に求めた。1372年に明に初めて入貢して以来、中国・東南アジア諸国と積極的に交易を行い、それを通して、独特の工芸を作り上げてきた。しかし、国の事業として進められてきた工芸も廃藩によって民営となり、市場経済に移るようになった。現在では、洋装や室内装飾・小物などへ進出しつつある織物や紅型。日常の生活用具・室内装飾・屋外装飾・建築などへ用いられるようになった陶器やガラス。生活用具のほか、家具や建築などへの展開が期待されている漆器。

このように、多様化し高級化する工芸品は、技術やデザイン・流通などの課題を乗り越えることによって、さらに大きな発展が期待されているようである。

今回は、豊富な工芸品を訪ね、製品と製品を作り出す人に触れ、事実を知ることからはじめたい。

(2) 指　導　観

学習の主体者は一人ひとりの子どもである。子どもが主体的・意欲的に追求していくためには、一人ひとりの子どもの考えの筋道に合った学習過程の設定に配慮しなければならないと考える。そのため、学習は子どもの興味・関心から出発したい。そこで、まず、生活の中に伝統工芸品があるのか調べ、そこから「問い」を見つけ発展させていきたい。指導計画は弾力的に取り扱い、子どもの「問い」と話し合いの流れにそって組み替えていけるようにした。ただ、興味・関心がすぐ出てくるとは限らない。友達の話を聞いていてパッとひらめき、そこから考え興味がわく場合もあるのではないだろうか。

そこで、「問題をつかむ」導入の段階では、興味・関心を持たせるような授業の展開が必要である。今回は伝統的工芸品の実物をできるだけ多く提示し、直に触れさせたい。また、生活の中でどのような使われ方をしているのか実際に持ちより報告し合いたい。おそらく、沖縄の工芸品は、高価なので室内装飾に使われていることも多いと思うが、実生活で活用している面もあるので、身近に感じやすいのではないかと考える。

校区には、紅型工房が一軒あるが、地域が紅型で発展してきたわけではないので、紅型だけを教材として取り扱うのではなく、沖縄の工芸品を全般的に取り上げ特に子ども達の興味あるものから出発したい。その過程で、地域でも伝統工芸品を作っている人がいるということを気づかせていきたい。

子ども達は問いを追求するために調べる。そして、情報を得る。得た情報を子ども達は、誰かに知らせたくなるのではないだろうか。他の誰も知らない情報を獲得した子ども達の目は、さらに輝き、主体的・意欲的に追求していくだろう。

(3) 児　童　観

沖縄は、伝統工芸品の宝庫である。通産省が認定している工芸品だけでも、１３品

目（壺屋焼・琉球漆器・琉球紅型・喜如嘉の芭蕉布・読谷山花織・読谷山ミンサー・首里織・琉球絣・久米島紬・宮古上布・八重山上布・八重山ミンサー・与那国織）ある。また、琉球焼・琉球ガラス・ウージ染め・三線などは、認定はされていないが沖縄の代表的な工芸品であり、これからもさらに、需要の増えてきそうな工芸品である。しかし、学級の中で、家業が工芸品に携わっているという子は一人もいなかった。「『伝統工業』とは、なにか。」の質問にも「昔から伝わる工業」（4人）、「伝統工芸品を作ること」、「機械じゃなく手作業でやること」と答える子ども達は数名いたが、ほとんどの子が「昔に関係がありそうだがはっきりわからない」と答えた。そこで、「伝統工業とは、なんだろう。」から学習に入ることにした。

子ども達は、焼物・ガラス・織物・漆器の順で興味を持っている。しかし、紅型にはあまり興味示さない。また、調べてみたいことに、材料・工程・歴史などがあるが、ほとんどの子が興味ある工芸品を作ってみたいと答えた。

「稲作にはげむ人々」の単元では、稲を育てる体験学習を取り入れてきた。子ども達は資料だけで調べる学習よりも意欲的に参加し理解を深めていった。今回も学習の過程で体験活動を効果的に取り入れていきたい。

また、「問い」を解決するために調べ、発表することは、学習意欲の喚起・持続を促進した。しかし、「問い」を受け止め発展させることや、「問い」を対話を通して深めることが不十分であった。今回は、以上の点に注意しながら学習を進め、子ども達どうしのかかわりを深めていきたい。

〈学習に入る前の子どもの興味・関心・疑問〉（一部）

- 大きな壺・シーサーを作ってみたい
- 壺は何日ぐらいでできあがるのか
- 伝統とは何台続いているか
- 壺を作る土はどこからとるのか
- 壺はどうやって作るのか知りたい
- 壺を作ってみたい
- 壺やシーサーを作る時に気をつけているところはどこか
- シーサーの「幸福をつかんで、逃がさない」という意味はだれが考えたのか
- 昔のコーラのビンなどを使ってガラスコップを作ってみたい
- いらないガラスはどうするのか
- ガラスを作るのは大変なんだろうか
- 機織りを経験したい
- 生地の材料は何か
- 着物を一着作るのにどのくらいの材料が必要か
- 着物を作ってみたい
- 漆器の材料を知りたい
- 漆器はいつ頃から作り始めたのか
- 漆器の歴史を調べてみたい
- 琉球漆器を作ってみたい
- どうやって着物に色をつけているのか
- どうやって漆器に絵を描いているのかしりたい
- 着物はどれくらい売れているのか
- どのくらいの人たちが作っているのか
- 伝統工業にはどれくらいの数あるのか
- どのくらいの値段で売っているのか
- 材料は、どんな物を使うか
- 県外でも作っているのか
- 工芸品を作ってみたい
- 作っている人に尋ねたい
- 何のために伝統工芸館があるのか調べてみたい
- 一番売れている工芸品は何か
- 昔の作り方と今の作り方は違うのか
- 伝統工業で作られた物は、どんな風に役立っているか

4 学 習 計 画（11時間）

	時	学 習 活 動	教 師 の 支 援	資 料 ・ 評 価 （ ☆ ）
問題をつかむ	2	1伝統工業とは、何か。 2家にある伝統工芸の製品について話し合う。	・ずっと昔から、その土地でこつこつ行われてきている工業に着目させる。 ・焼物・漆器・ガラス紅型・織物など沖縄の工芸品について知らせる。 （家から持ちより、見せ合う）	農産物・水産物・工業製品 ワークシート ☆伝統的な工業を身近なくらしの中でとらえ、工芸品について関心を持つことができたか。（関・意） 全国の工芸品のポスター 沖縄の工芸品のポスター 工芸品の実物 ☆自分なりに考えた学習問題を友達と比較しながらワークシートに書くことができたか。（技・表）
見通しを持つ	1	3興味のある物・調べてみたいものを中心に調べる計画や方法を考える。 （興味を引いたことを出し合い問題作りをする。）	・調査方法や調べる場所など、より詳しく話し合わせる。 ・グループ作り ・効果的な表現方法を考えさせる。 ・問題作りのできない子には、その調べたい工芸品の『自慢さがし』を促す。	沖縄の工芸品のポスター ワークシート ☆意欲を持って計画を立てていたか。 （関・意） 探検ノート
追求する	2	4学習問題に基づき追求していく。 （探検隊出発） ・焼物 ・琉球ガラス ・漆器 ・紅型 ・織物・その他	・学習の中で子ども達から出てきた興味や疑問を中心に調べさせる。 ・調べる際の安全面の確認を充分行う。 ・「活動報告書」を提出させる。 （調べる内容・場所・交通手段・行き帰りの時間を書いたもの） ・伝統的工芸品産業の	安全面の確認 活動報告の用紙 ☆本・資料・現地見学・聞き取り調査から意欲的に調べることができたか。（関・意）

追求する	3 図工	5調べたことを発表する。（探検隊報告会） （本時） 6新たな問いを持つ。 7さらに、追求する。 8できそうな工芸品を作ろう	振興に関する法律（伝産法）に適用される工芸品に限らず地場産業は取り入れる。 ・子どもが追求したいテーマを調べやすいように資料コーナーを設置する。 ・効果的な方法で各グループ発表させる。 ・自信を持って、意見や質問が言えるように声かけ支援する。 ・質問を受け、話し合い新たな「問い」が出たら、また調べさせる。 ・小さな疑問・新しい興味を出させる。 ・的をしぼり、調べ、発表させる。 （時間が足りなければ朝の会で発表） ・図工の時間に実際に作り、手作りのむずかしさ、技術の高度さに気づかせ、手作りの良さを体得させる。	☆調べたことをもとに発表し、考えあうことができたか。（思・判） 探検隊報告会 各グループの資料 ・ＯＨＰ ・ビデオ（視聴覚機器） ・写真 ・実物 ・図表 ・パンフレット ・新聞 ・ワークシート等
まとめる	2	9これまでの学習を振り返り、まとめ発展させる。 ・学習したことから、さらに調べてみたい子がいたら、自由研究として促す。	・感想や意見をまとめさせる。 （パンフレット・個人新聞・絵本・その他等）	☆いろんな工芸品について知り、手作りの工業の良さを理解できたか。（知・理）

5　本　時

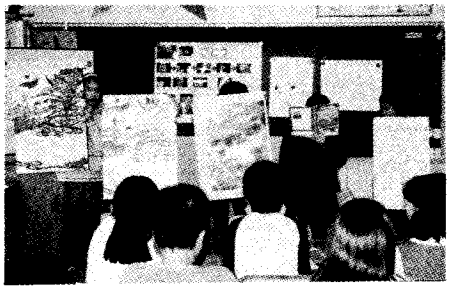
(1)　ね　ら　い

- 伝統工芸にこだわり、追求し、それをもとに自分の考えを発表することができる。
- 友達の発表を自分の調べたことと関わらせながら聞き、伝統工芸についてより理解を深めることができる。

(2)　本時の仮説

伝統工芸探検隊の報告会を開き、話し合うことにより伝統工芸に対してより関心を示し、理解を深めることができるであろう。

(3)　展　開（6／11時間）

流れ	学　習　活　動	教　師　の　支　援	資　料
つかむ	1　沖縄の伝統工芸（漆器と紅型）について確認する。 	・実物をみながら、興味を持たせる。 ・漆器・紅型探検隊がこれまで意欲的に活動していた様子を評価する。	琉球漆器 琉球紅型
追求する	2　漆器・紅型グループの発表 ○生産工程 ○技術 ○原料 ○道具 ○その他 （歴史・使われ方など） ・発表を聞きながらメモをとる。 ・質問に答える。 	・各テーマにそって、資料から得た事実をもとに自分（グループ）の考えを発表させる。 ・各グループ１５分以内で発表できるようにまとめ方を考えさせておく。 ・各グループの発表を聞いてわかったこと、疑問に思ったことなど自分の感想をしっかり持たせる。 ・不思議に思ったこと・はっきりしないこと・納得のいく内容など、もう少し聞いてみたいことを質問させる。 ・２つのグループが発表し終わったら、似ているところ・ちがうところを出し合い話しあわせる。	各グループの資料 ワークシート
まとめ	3　ワークシートに感想を書く。	・発表を聞いて疑問に思ったことは、「新しい問い」としてさらに調べていくことを促す。	

(4) 評　価

- 伝統工芸にこだわりを持って追求し、自分の考えをまとめ発表することができたか。
- 友達の発表を聞き、考え、伝統工芸についてより理解を深めることができたか。

6　検証授業を終えて

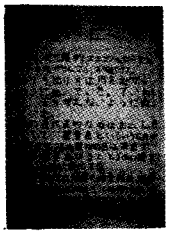
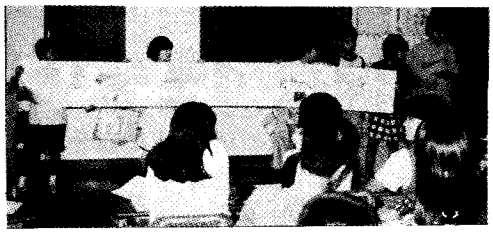
探検学習を子ども達は「楽しい」と評価している。そして、たくさんある工芸品の中から一番興味を持った工芸品を選び、「問い」を持ち、主体的に調べ、得た知識や情報を友達に伝え、話し合う活動も意欲的に取り組んだ。また、調べるために電話で連絡し、会う約束をしたり、話すときのマナーを確認したりと探検学習の方法も理解してきた。

子ども達は、探検を「どんな所だろう」「無事に探検を終えるだろうか」「どんな人が説明してくれるかな」「いい人だったらいいな」「どんな作品を作っているんだろう」等、思い描きながらワクワクドキドキしながら進めた。

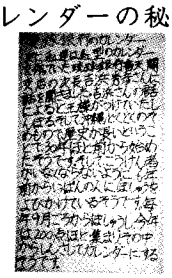
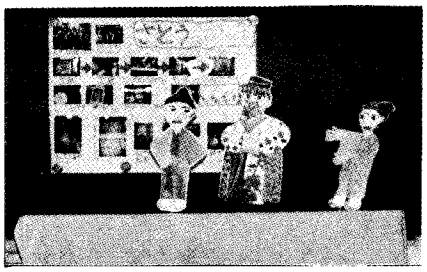
子ども達が、選んだ工芸品は次の６つで、「問い」はグループの話し合いに任せた。

子どもが選んだ工芸品	各グループで話し合った「問い」
首　里　織 （那覇伝統織物事業協同組合）	・一反織るのにどのくらいの時間かかるか ・材料　・作り方（順番） ・だれが最初に織り始めたか ・踊り以外は何に使っているか
琉　球　漆　器 （那覇市　紅房）	・どんな順序で作っているか ・漆器の歴史　・原料（うるし） ・作るとき大変困ることは何か・工夫していることは何か ・１つの漆器を作るのに何時間かかるか
琉　球　紅　型 （普天間紅型工房）	・紅型の歴史　・作り方　・紅型の由来 ・１日に作る紅型の数は　・材料　・工夫していること ・なぜ、紅型を作り始めたのか・作る上で苦しいことは何
琉　球　ガ　ラ　ス （那覇市伝統工芸館）	・どんな物でもとは何か　・材料は何を使うか ・やっていて大変なことは何か　・コツは何か
壺　屋　焼 （育　陶　園）	・作り方　・焼くのに何時間かかるか　・焼き物の歴史 ・材料はどこから取り寄せているのか ・１日約何個作れるか
読谷山花織・ミンサー （読谷民芸センター）	・材料　・作る時の順番　・作る前の気持ちは ・この仕事を始めて何年になるか

(1) 授業の記録 ①「漆器」グループの発表

子どもの活動・学習材と情報	子どもの学習を捉える視点
①私たちは「琉球漆器のひみつ」をさぐりました。（壁新聞） 	子ども達には、初めて得る情報ばかりだった。まとめる時、「ひみつ」ということで、発表をグループなりに工夫していた。これは聞く方も興味を引き、意欲につながると考えた。
②琉球漆器の作り方（屏風式紙芝居） 	漆器グループは原料や工程を中心に調べていた。最初の問いの中に「漆器の歴史」があったが、見学して初めて漆器がうんと手間のかかる物であることに驚き、また、木地や絵付けに興味を持ち「歴史」のことをすっかり忘れていた。このことは、この後の新しい問いへとつなげたいと考えた。
③調べての感想 ・ぼくが紅房さんに行って感じたことは、だいたいが自然の物を使って、自然の物を作っていたのですごいなと思いました・一つの漆器を作るのにも、いろいろな人が手間ひまかけて頑張っているんだなと思いました・一つの漆器を作るのにも大変だなと思いました・上塗りは、一つのゴミが入るともう一度なので大変だなと思いました・漆器の作り方は簡単なのかなと思っていました。だけど、工場の中を見学してみると一人ひとりが一生懸命漆器を作ったりしていたので、そういうあまい言葉は使ってはいけないなと思いました・漆器には種類はないと思っていたけど、いろいろな作り方があることを初めて知りました。	一生懸命作る職人さんの姿を見て、あまい言葉で表したらいけないなと感じている。
・そして、工場の人にアンケートをとってみました。このアンケートをまとめてみんなにも知らせたいと思います。〈新しい問い〉	・工場の人へのアンケートも新しい問いとして展開した。「どんなことを思って作っているんだろう」と作る人の努力や工夫を学習できると考えた。
④（発表の後）　質問（問い）はありませんか。 Ｐ１　世界で二番目に軽いということはどういうことですか。⇒でいごの木が乾燥されて世界で二番目に軽くなるということです。 Ｐ２　センダンの木とは何ですか。⇒センダン科の落葉木。高さ20ｍに達する。枝は太く、葉は長さ５～10ｃｍ。 Ｐ３　堆錦というのは何ですか。⇒堆錦はまず漆器を彫って、その彫った所に漆を塗って上から模様をはりつけます。 Ｐ４　世界で一番軽い木は何ですか。⇒まだ調べていません。調べてきます。 Ｐ５　分布って何ですか。⇒そこらへんに広がっていることです。 Ｐ６　上塗りは何回やるんですか。⇒４～４回です。 Ｐ７　バガスって木なんですか。⇒バガスというのは、サトウキビの汁を搾ったかすのことです。	ここでは、アンケートがないので働く人より漆器の素材に関心がいった。日頃は、漆の下にかくれているので木地はなんなのかが興味深い。 堆錦は沖縄独特の技法である。もう少し発言がほしかったが次の質問へすぐ、移ってしまった。やはり、言葉だけでは思い描くことはできない。
⑤ビデオ放映（自作ビデオ）	最後に、漆器を作る工程を映したビデオを放映した。「百聞は一見にしかず」である。これまでの説明と質問の内容が一目で理解できた。子ども達は、真剣に見ていた。

② 「紅型」グループの発表

子どもの活動・学習材・情報	子どもの学習を捉える視点
① これから出てくる人物は昔の人ですが、話の内容は現在のものです。（ペープサート） 「むかしむかし、まだ琉球の国王がいた頃のお話です。ある日、他の国の使いが、王様へ琉球をよこせと言ってきました。」 （自作のシナリオを読み、人形を動かす） 〈登場人物〉王様・佐藤さん・使い①・使い② 〈主な内容〉 ・「紅入色型」→「紅型」 ・15世紀頃作り出され、18世紀頃完成 ・王様や偉い人の着る洋服。一般の人が着てはいけない。着る人の地位によっても模様や大きさが決まっていた。 ・中国・東南アジア・インドから伝わった。 ・（作り方）おおまかに 型紙→型置き→染める→こまずり（ぼかし）→むす→洗う→仕上がり ・ルクジュウの説明（ビデオ放映） ・一つ作るのに一ヶ月ほどかかる。 ・紅型に必要な道具 「こうして、紅型を作る人によって、琉球は救われたのでした。」 ② 紅型を作る時の道具の説明（実物） ③ 琉球銀行のカレンダーの秘密  ④ 調べての感想 ・私は、紅型のことを佐藤さんの所に調べに行って、最初怖いという印象を受けました。でも、話しているうちにいろいろなことを聞けたので、佐藤さんに出会えてよかったと思っています・紅型の勉強をする前に飼育小屋の後ろに紅型工房があることを初めて知りました・紅型が500年の歴史があるなんて初めて知りました・はじめ紅型を見た時、ただきれいだなーとしか思わなかったけど紅型の勉強をしてこんなにすごい歴史があるんだなあとわかりました・紅型にこんなに秘密があるんだなあと知りました。 ⑤ （発表の後） P１ 道具は何個ぐらい使われているんですか。 →だいたい15個ぐらいです。	最初、このグループのテーマは「紅型」だった。佐藤さんという人を学級のみんなにも身近に感じてほしい意図があり「佐藤さんの紅型」にしてもらった。 佐藤さんの紅型工房は学校の、飼育小屋の隣にある。予想どおり子ども達は、飼育小屋の隣のその建物が紅型工房だということを全く知らなかった。 紅型グループは、問いを全て新しい情報に変えた。場所が近いこともあったが、一番の理由は佐藤さんという人を理解でき、佐藤さんの人柄にひかれていったからである。 一回目の探検から帰ってきた子ども達は「先生ちゃんと教えてくれたけど、とてもきびしい人だったよ。こわいな」ともらしていた。 古い大きな紅型の専門書を佐藤さんからかりて、シナリオを書いていた。その間にも、わからないことが出てくると電話をかけ約束し、何度も探検していた。働く人の工夫や努力をおしゃべりの中から子ども達は感じたようだった。 発表に必要な小道具作りや発表の練習も楽しんでやっていた。新しい新鮮な情報をみんなに知らせることで、協力の大切さを感じ、シナリオを書き上げ、発表することで成就感を味わった。これは、他のグループへの意欲へとつながった。 また、琉球銀行のポスターのひみつも探りはじめた。「なぜ、琉球銀行が紅型をポスターにするのか」という「問い」を持ち、探検に出かけている。ここで、子ども達は、紅型が「後継者不足であった」ことを知った。他の工芸品はどうなのか、他のグループの発表の時にもつなげたいと思った。  このグループのペープサートは、工夫されていた。王様が着ている着物が紅型の模様であったり、話は「他の国

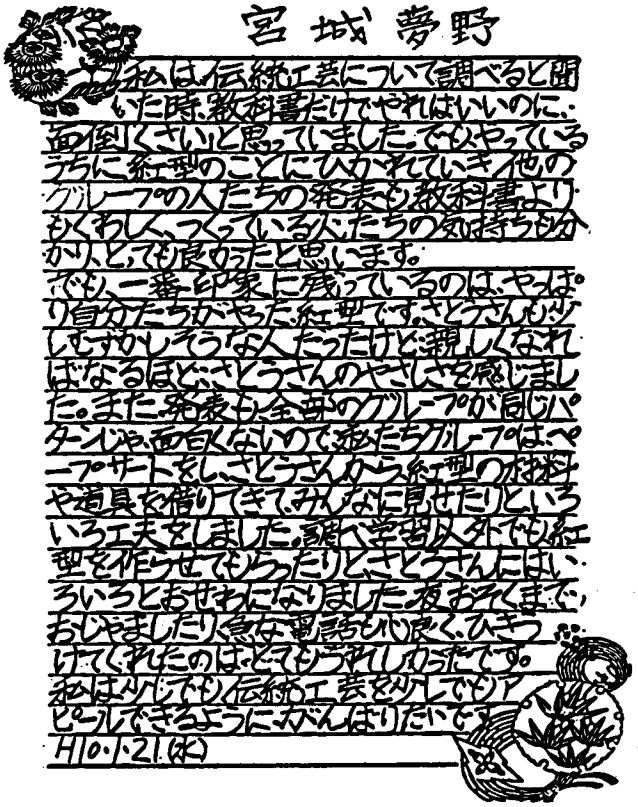
P２　なんで王様が着る着物は、普通の人が着てはだめなんですか→王様のシンボルだったからです。 T　紅型が王様のシンボルだったわけれ→はい P３　あの小さい筆はどんな時に使うんですか→例えば、こういう細かい所を塗る時とかありますよね。細かい所やぼかす時に使います。 P４　（紅型は）今は普段でも、普通の人でも着られるんですか→はい	の使いが琉球をよこせといってきている。佐藤という紅型職人が紅型の良さを長々とていねいに語る。使いが紅型の良さと佐藤の熱心さに心を打たれ国へ帰っていく。琉球は、支配下に置かれることなく、無事だった」という内容である。全て視覚に訴える物ばかりで聞いていた子ども達も、興味津々であった。 佐藤さんのことを劇の中で登場させ、紅型の素晴らしさと佐藤さんの誠実で温かみのある部分を見事に捉え表現していた。

(2) **考　察**

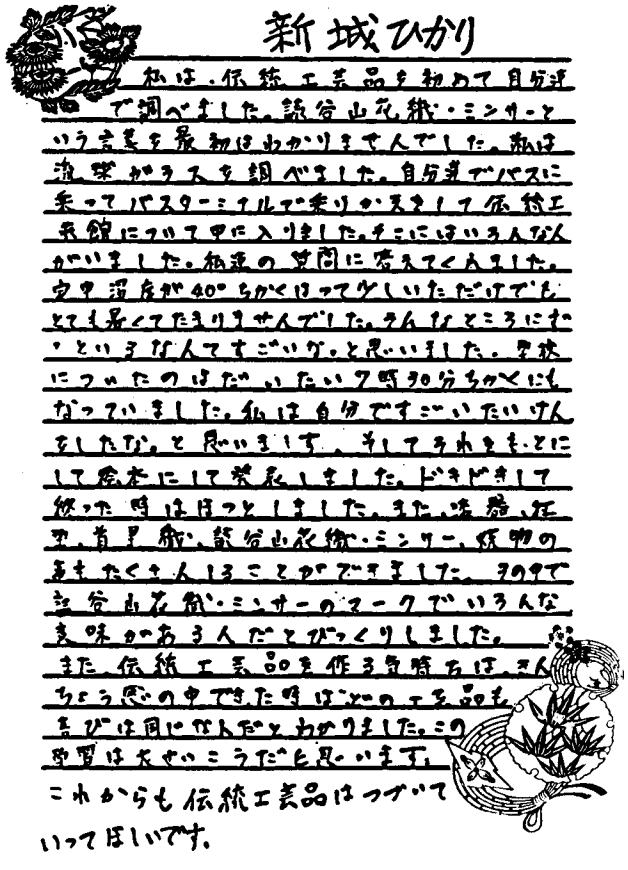
どのグループも意欲的に取り組んだ。探検も楽しいが発表の準備や発表も喜んでやっていた。そして、自分の調べたことと関わらせながら聞き、伝統工芸により関心を示すようになった。自分達の調べた工芸品を好きになり、自信も持った。しかし、六つの工芸品のうち、一番興味を持った工芸品一つにしぼって、クラス全員で見学・調査し、話し合うという学習を展開していきたかったが、そういう「問い」を引き出すことができなかった。

それは、教師の見通しが浅かったことと、教材研究の不足、また、子ども達が自分の調べた工芸品にさらに興味を持っていたからではないかと考える。これからも、子どもの「問い」を通して、教材研究を見直していきたい。

7　資　料


宮城夢野

私は伝統工芸について調べると聞いた時、教科書だけでやればいいのに、面倒くさいと思っていました。でもやっているうちに紅型のことにひかれていき、他のグループの人たちの発表も教科書よりもくわしく、つくっている人たちの気持ちも分かり、とても良かったと思います。
でも、一番印象に残っているのは、やっぱり自分たちがやった紅型です。さとうさんも少しむずかしそうな人だったけど、親しくなればなるほどさとうさんのやさしさを感じました。また、発表も全部のグループが同じパターンや、面白くないので、私たちグループは、ペープサートをしさとうさんから紅型の材料や道具を借りてきてみんなに見せたりといろいろ工夫をしました。調べ学習以外でも紅型を作らせてもらったりしてさとうさんにはいろいろとおせわになりました。夜おそくまでおしゃべりしたり、急な電話も快く、ひきうけてくれたのはとてもうれしかったです。
私は少しでも伝統工芸を少しでもアピールできるようにがんばりたいです。
H10.1.21(水)


新城ひかり

私は、伝統工芸品を初めて自分達で調べました。読谷山花紙・ミンサーという言葉を最初はわかりませんでした。私は琉球がうスを調べました。自分達でバスに乗ってバスターミナルで乗りかえをして伝統工芸館について中に入りました。そこにはいろんなんがいました。私達の質問に答えてくれました。室内温度が40°ちかくはってすしいただけでもとても暑くてたまりませんでした。そんなところにむ・という人ですごいな。と思いました。学校についたのはだいたい7時30分ちかくになっていました。私は自分ですごいたいけんをしたな。と思います。そしてうれしかったことにして感想にして発表しました。ドキドキして終った時はほっとしました。また、焼物、紅型、首里織、読谷山花織・ミンサー、織物のあもたくさんほることができました。その中で読谷山花織・ミンサーのマークでいろんな意味があるんだとびっくりしました。
また、伝統工芸品を作る質問ちは、さんちょう感の中でした時はどれの工芸品もきびは同じ仕方だと分かりました。この学習は大切こうだと思います。
これからも伝統工芸品はつづいていってほしいです。

Ⅵ　研究の成果と今後の課題

本研究で、「子どもが主体的に取り組む社会科学習の展開」をめざし、『伝統に生きる』の単元で「子どもの問い」から出発する学習を展開してきた。学習前、全然関心がなかった子も自分達で探検し調べることで、また、友達の発表を聞き交流していく中で、次第に伝統工芸品の持つ良さに気づいていった。そして、伝統工芸は「すごい」と驚く子や「自分の漆器を作って持ちたい」・「紅型を作る人になりたい」等、伝統工芸に携わってみたいと答えている子もいた。「問い」を探検を通して解決し、友達と交流することで深めていくような学習を教師が保障していくことはとても大切だと考える。このような学習は、合科的学習へと発展していくことも多い。子どもらしい発想の中に考えを深め、楽しく学習できる要素があると確信する。これからも、子どもと共に学ぶ教材の開発に努めたい。

1　研究の成果

- 子ども達の生活の中にある伝統工芸品を見つめさせ、それを交流する中から「問い」を持ち、学習を出発させることができた。
- 子ども達が考えた「問い」を、探検し学習していくことによって、生き生きと主体的に取り組むことができた。
- 調べたことを学級で発表することにより、効果的なまとめ方を考えたり、発表の練習をしたり等、友達に教えることの喜びを感じ、友達の発表を聞く楽しみを得た。
- 「伝統工業」というのは、子ども達にとって見えにくい世界だが、この学習をすることにより、少しでも身近に感じたのではないかと考える。

2　研究の課題

- 「問い」を受け止め発展させることや「問い」を対話を通して深めることに注意しながら、学習を進めてきたが、不十分であった。これからも実践を積み子ども主体の学習を展開していきたいと考える。
- 社会科だけではなく、教育活動全体において、子ども達の発想を大事にする授業を考えていく必要があるのではないだろうか。
- さらに、子ども達が活動しやすい場や何でも発言できる雰囲気づくり、友達をほめることや友達を認めていく等の学級集団づくりに力を入れていきたいと考える。

〈主な参考文献・引用文献〉

外山英昭著　「地域学習と調べる社会科」　民衆社1985
外山英昭・田所恭介・満川尚美＝編「(教え)から(学び)への授業づくり 社会科」　大月書店1997
臼井嘉一・宮原武夫編　「わかる教え方」　国土社　平成４年
外山不可止　「子どもと学ぶ　日本のコメづくり」　地歴社1994
文部省　「新しい学力観に立つ　社会科の学習指導の創造」　東洋館出版社　平成５年
熱海則夫監修　「89小学校学習指導要領　社会科の解説と実践」　小学館　1989